蔵王山安善寺・本堂

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811
◆スタッフ◆
安藤一夫 小林国二 小林善秋 高橋潔
佐藤正樹 近藤マリ子 近藤善信
印刷・(株)北越時報社

ご家族の皆様でご覧ください

迎春

今年も宜しくお願い申し上げます

人々の心を照らす

翠巌 龍弘

今年から二十一世紀、この世紀が争いのない、すべてのいのちを大切にする時代になることを冀うものであります。

人間は、昔から同じような問題に悩み苦しんできましたが、新世紀になって、どんなに時代が変わろうとも、人間にとって大事にしなければならないことは、同じではないでしょうか。

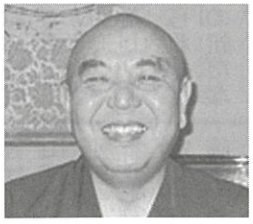
四世紀の終わりごろ、南インドに香至国という平和で豊かな国がありました。国王には三人の王子がおり、深く仏法を信じ、禅門第廿七祖・般若多羅尊者に師事しておりました。

あるとき、王は仏恩への感謝のしるしとして、尊者に無価の宝珠（値打ちのつけようがない珠玉）を供養されました。

尊者はその宝珠を受けた後、三人の王子の前にさしだして「この宝珠より立派なものがあるだろうか」と質問されました。

第一、第二王子は「宝珠は七宝の中でも最高のもので、世界にこれ以上のものはありません。尊者のような聖なるお方が受け取って然るべきです」と答えました。

第三王子は「この宝珠が立派だといっても、結局は世俗の宝ですし、これ以上のものが発見されることもあるでしょうから、最上とは言えません。壊れることもあり、火事に遭えば燃えてなくなります。また、この玉は燦然と光り輝いておりますが、その光は他の光を借りて輝いているのであって、それ自身が発光の根源ではありません。最上の宝は法という宝です。最上の光は智慧という光です。お釈迦様の教えは、それ自体が輝かしく、人々の心を照らしてくださいます」と答えられました。



この第三王子が、第廿八祖・中国禅門の初祖となられた菩提達磨さまです。

現代は自分を持たなく、格好だけ追い、周りに流される人がたくさんいます。

二十一世紀は、各々が人間にとって何が一番大切なのかを考え、真に自身を輝かせ、周りの人々の心を照らす世の中になってもらいたいものです。

人はひとりでは生きていけない。他を愛し、他と共存して助け合いながら生きていくのだ。

【近隣寺院紹介】

安善寺本寺 栖吉山普濟寺

普濟寺住職　金子 弘久

普濟寺は、長岡の街から東に四キロ、鋸山、森立峠、八方台、風谷山を背景に「東山県立自然公園」内の、城山（大河ドラマ『天と地』の舞台となった旧栖吉城跡）の麓に、ブナの大樹群、それに競って連なる杉の木立、山門を入れば、うっそうと繁る竹林があたりを暗くする静かな山間の古刹である。

叢創は延元三年（一三三八）、京都五山のひとつ、臨済宗東福寺の大用和尚が撥創したと『扶桑五山記』に記されている。大用和尚は当時、上杉憲顕が越後守護として上条城に入った折、伴われてきたのであろう。

その後、康永年中（一三四二～一三四四）別伝妙胤（元から来朝した僧）が普濟寺の住職となった（延宝伝統録）。この妙胤は、京都建仁寺の第三十一世の管長になった人である。

普濟寺山門　阿部昭次様

また、天竜寺の管長、季瓊真蘂は「陰涼軒日録」の中に、『寛政五年（一四六三）梵付首座を普済寺の住職に定める』と記されている。

当時、普濟寺が京の五山より住持職を招聘するか、或いは交替制か輪番制かは定かでないが、何れにしても京の中央にも通じた古刹であったことには違いない。

現在、寺の裏山を散策すると、雑木林の所々に、旧建物跡とおぼしき平坦なところや、宝蔵跡、石組み跡、意味ありげな大きな石の並びなど、現存の古図にあらわれる七堂伽羅の様子がうかがわれる。

普濟寺は、越後守護職上杉家代々の祈願所であった長尾氏が、守護代として越後に入り、明応初年の頃（一四八〇～一四九二）、蔵王堂城主長尾豊前守（古志長尾）が栖吉城を築いて、ここに移り、城内の普濟寺と寺内鎮守鎧山諏訪本社（旧栖吉村善応寺維鎮守、城山および山麓を含めて鎧城と称し山頂部を冑城、山麓部を鎧山と呼んだ）と深い関係を保ち、長尾氏の親近者で出家した者もあり、普濟寺は栖吉城内の祈願所と同時に安息隠棲の麓の寺として、上杉・長尾の保護を受け、城主長尾豊前守房景の子女は、守護代上杉為景に嫁して、謙信を生んだ虎御前・袈裟御前と称せられ、時折山を下っては、普濟寺で安息したのであろう。

栖吉城も四代・百二十余年間栖吉長尾の居城として発展したが、慶長三年（一五九八）上杉家の会津移転により廃城となった。

上杉謙信とゆかりの春日山城下の林泉寺（越後守護代長尾重景の開基）と下総の国香取郡嵯峨碕村（現千葉県）長興院とは、了菴禅師の流れをくむ同派の寺院で、長興院の二世である長翁昌宗禅師が天文六年（一五三七）普濟寺に入山し普濟寺のご開山となられ、ここに曹洞宗普濟寺の新たな歩みが始まったのである。

さらに、その六年後の天文十二年（一五四三）、皆さまの菩提寺である蔵王山安善寺をお開きになったのである。

最後ですが、戊辰の役で、堂々たる苦汁を味わった長岡城と、初代藩主牧野忠成公と普濟寺について、五輪塔・ブナ林などの因縁を記してみよう。

長岡城初代藩主牧野忠成公は、天正九年（一五八一）康成長子として、愛知県豊川市牛久保で出生、十九歳から諸戦に参戦。その軍功により、三八歳の元和四年（一六一八）、頴城吉川長峰城五万石から、長岡六万四千石（二年後栃尾一万石を加増）に移封され、牧野氏初代長岡藩主となった。

承応三年（一六五四）、七四歳で江戸屋敷にて没し、遺骸は長岡に送られ遺言により、栖吉普濟寺の裏山頂で火葬に付され、越後平野一望の地に墓石を建て（現在の五輪塔・長岡市指定文化財）、さらに遠方より確認できるよう、ブナの群生を植え、山中ひときわ青々とした好個の目印としたのである。現代版国土緑化運動のさきがけといわれよう。

ご承知のように、長岡城は徳川譜代大名として十三代二百五十年間、質実剛健の気風を身に付け、常に戦場の心構えを持って、明治維新まで繁栄したが、明治元年（一八六八）北越戊辰戦争で七月二九日落城、九月二五日、十二代藩主牧野忠訓は城を明け渡したのである。

時に普濟寺第二十四世、大安泰道代であった。

良寛さんは長岡の彦孫でした

長岡良寛の会幹事　築井　仁

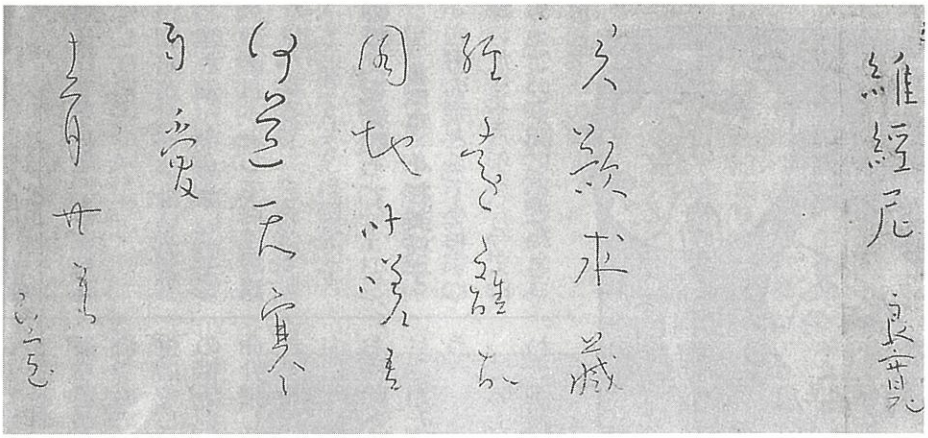
ご住職から、連載するようにとのお言葉ですので、今後は良寛さんのお遺墨や資料から、良寛さんのお心を偲ぶとともに、ご生涯などにもふれて参ります。

今回は維馨尼（維香尼、徳充院ともいう）宛の手紙と良寛さんが長岡の彦孫であったという大発見です。

良寛さんの生涯は不明なことが多く、明らかなのは亡くなられた一八三一年一月六日だけと言われるほどですが、この手紙は内容から六十歳の一八一七年前後とみられています。

維馨尼は、与板の名家三輪家の生まれで、同じく与板の名家山田家の三男に嫁ぎましたが未亡人となり、徳昌寺の虎斑和尚の下で出家された方です。良寛さんの弟子の三輪左一の姪ですので、良寛さんとは古くから親しかったとみられます。

写真は



江戸二て　維経尼　良寛
君欲求蔵経　遠離故園地
吁嗟吾何道　天寒自愛
十二月廿五日　良寛

読みは「君は蔵経を求めんと欲し　遠く故国の地を離る　吁嗟　吾何をか道はん　天寒し自愛せよ」

当時、虎斑和尚は中国の明の時代に出版された大蔵経六千七百十一巻が二百二十両（現在の約二千万円）で古書店に出たことを聞き、購入金集めに苦労していました。維馨尼はこれを助けるため病弱の身をおして江戸へ托鉢に出掛けられたのでした。

そして、五年後の一八二二年二月に五十八歳で世を去っておられます。

意訳は「お前様は大蔵経を求める為に　ふる里の地を遠く離れた江戸で苦労していらっしゃるだのう　ああ、そのご苦労に私は何とも申し上げようもございません　寒さはますます厳しくなりましょう　くれぐれも体を大事にしてくだされや」ではいかがでしょう。十二月廿五日は、現在の太陽暦では二月三日ですから寒さが想像できましょう。

維馨尼は良寛さんより七歳若かったことから、爽やかなロマンスを想像する方も多いのですが、私は良寛さんのあふれる慈愛のおこころと、筆跡の勁さに心うたれて拝んでおります。

この遺墨は、故近藤敬四郎さんの収蔵品でしたが鎌倉に移住のとき寄贈され、今は良寛記念館に珍蔵されております。また、複製を限定印刷され関係ある方々に配布くださいました。

なお、安善寺中興開墓の王山院殿天岩木意大居士様は三輪家のご出身です。ご命日は一六四〇年（寛永十七年）九月九日ですから維馨尼さんの百八十年前となります。

長岡良寛の会の池田光知会長が数年苦労された調査では、長岡と与板の名家とのご縁は相当でございます。三輪家では、維馨尼の妹さんが長岡の西福寺様に嫁がれ、三輪家の分家には長岡の宮内家と鈴木家から養女と後妻が入っております。

そして何よりも驚いたのは、良寛さんが長岡の彦孫であったことです。良寛さんの父親の以南さんは与板の新木家から婿入りされたのですが、母親は渡里町の猪俣家の長女だったからです。猪俣家の次女は山田家の長男に嫁いでおり、維馨尼の兄嫁でした。詳しくは十二月刊行の長岡良寛の会会報「優游」二十一号をご覧ください。中央図書館に寄贈してございます。

●

お願い　皆様のお宅に秘蔵の良寛さんや、良寛さんに関係する遺墨や資料をお見せください。この欄に紹介してまいります。もちろん、秘密は厳守いたします。

季刊十一号でも「国際菩薩道の御願い」でご案内いたしました、留学生に希望図書を送る運動に、三十七名の方々、合計　金参拾四万圓也のご協力を頂きました。十二月二日に、長野市の「円福友の会」へ届けさせていただきました。ご協力真にありがとうございました。深く御礼申し上げます。

また、ホームレスの方たちに、週に二回、長岡教会・善行寺（宮原）・安善寺を会場に、食事・炊き出しや、生活・自立の支援を行う運動（越冬友の会主催）をお願いしたところ、早速大勢の人からご協力をいただきまして、十二月末現在で、約　金二万六千円、お米沢山のご寄附をいただきました。御礼申し上げますとともに、今後ともご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

安善寺

読者からの便り

今号もたくさんの投稿をいただきました。所定の原稿用紙を使わず、別紙で送ってくださる方もいらして、恐縮する思いです。

●旅の朝

長岡市　中村健治

家にいれば、毎朝仏壇にお参りする人でも、旅に出るとすっかり忘れてしまう。

ある種の日常からの開放感を味わうのが、旅の目的のひとつとすれば、これもやむを得ないし、当然かも知れない。

しかし、朝、仏さまを拝むことで心が安らぎ、一日元気で気持ちよく働けると、習慣になった人も少なくないだろう。

私は、旅行に出ても、朝のお参りをしないと、どうも忘れ物をしたようで落ち着かない。

仏さまは心で拝むものといっても、やはり仏壇や仏像があってこそ、手を合わせる気持ちになる。

日本国中に旅館やホテルがどのくらいあるか判らないが、お客さま用に仏間を用意してある宿はあまり耳にしない。

旅館が気づかないのか、お客さまが求めないのか、仏教国日本としては不思議な気がする。

●義父を看取って

長岡市　小杉美枝子

四男の妻として小杉家に嫁いだ三十八年が、今ではあっという間に過ぎたような感じでございます。

明治二十七年生まれの父に仕えての毎日でした。父は厳格で気骨、真面目、正に生一本の性格でした。

白寿の祝いが過ぎたころより足が不自由になり、床について寝たきりのベッド生活でした。主人と私で父の相手をして、家で一生懸命介護してあげることができましたが、さぞかし、自由に外に出て、庭の草取りお掃除も、自分の思い通りにされたかったことでしょう。

この七月七日朝、手を合わせ感謝されて、眠るように天寿を全うされて、彼岸の彼方に旅立ちました。享年一〇七歳でした。

私も、嬉しいこと、楽しいこと、苦しいこと、怒られたこと、いろいろありましたが、父にお仕えできて、今では長い介護の時間が感謝の心に変わりました。

今は毎朝のおつとめ「摩訶般若波羅蜜多心経」のお経をあげることから一日が始まります。

●このごろ心配していること

三鷹市　平岡小夜子

この私どもが住んでいる地球が大変汚れています。東京の三鷹に住んで三十五年になりますが、まだ武蔵野の面影が残っていて自然がいっぱいあるところです。

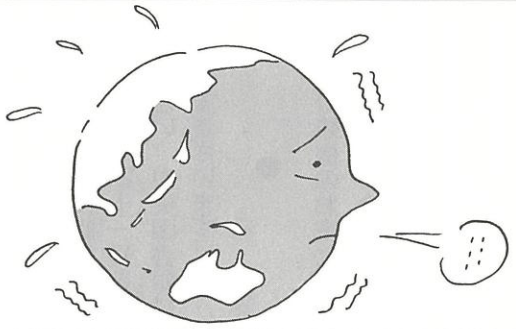
この静かな住宅街に、高速道路を通すという案が昭和四十一年に計画され、私どもはずっと反対運動をしております。国会に陳情に行ったり、都庁に行ったりしましたが、はっきりしません。何年か先には出来てしまうのではと心配しております。

次の世代を継ぐ子供らの健康にも影響することが考えられます。何と言っても自動車が多いことですね。

本当に地球上が何か狂ってきていると思います。地震は多いし、火山は噴火しますし、そのうち東京に大地震が来るのではと、ひとり心配しております。

私たちの地球を汚したり、壊したりしないでほしいと思います。

安善寺さんにはなかなかお参りに行けませんが、毎年お盆にお経に来ていただくことを感謝しております。これからもどうぞよろしくお願いします。



●とらわれなく生きられたら

柿崎町　小出優子

寺報を拝読し、ネパールの話を読ませていただきながら、日本は物が溢れかえりながら不幸せな気持ちしか持っていない。この心の渇きは何だろうと自問しました。

大人自体が心を無くした結果かなとも思います。ネパールに行ってみたい、子供を連れて行ってみたいと思いました。もう少しみんながペースダウンして、「こうあらねばならない」から逃れ、とらわれなく生きられたら…、と思いました。

●教えてください

長岡市　臼井虔一

戦中派で八十三歳になった私は職を六度も変わったし、長岡の戦災では丸焼けになり、いろいろなサークルや、団体の責任者や、世話役などをやり、人生いろいろな経験をしました。

父が熱心な仏教徒であったため、戦中、歎異鈔から始まって、何年か前からは、お寺の参禅会に仲間入りをさせていただきました。

しかし、パーキンソン病にかかり、主治医が「今はよい薬ができたから必ず治してやる」と言ってくださった通り病は治りましたが、体力が弱って、今年は坐禅が終わり立ち上がろうとしたとき、フラッとして廊下の向こうにぶつかりました。その後、家でも同じ障子を破ってしまいました。

それ以来、怖くなったので坐禅会は欠席して、毎朝、家で三十分だけ坐っていますが、まだ未練があります。

在家の御老人で、坐禅をやっている方が居られたら、年齢はおいくつで、どんな注意をして体を養って居られるか教えてください。同じ気持ちの方も居られる筈です。

（長岡市中貫町二-五-三）

●足ることを知り、これを楽しむ

柏崎市　須崎春雄

新年あけましておめでとうございます。

一昨年二月号の「禅の友」誌上で、「今なぜ小欲知足なのか」との記事がありました。この二百年で、欧米の科学技術と経済活動が世界を席巻し、日本は敗戦を契機に経済中心の政策に転換しました。その結果、生活の快適さこそが幸せと思い込んだ、とのお話です。私もその通りだと思います。

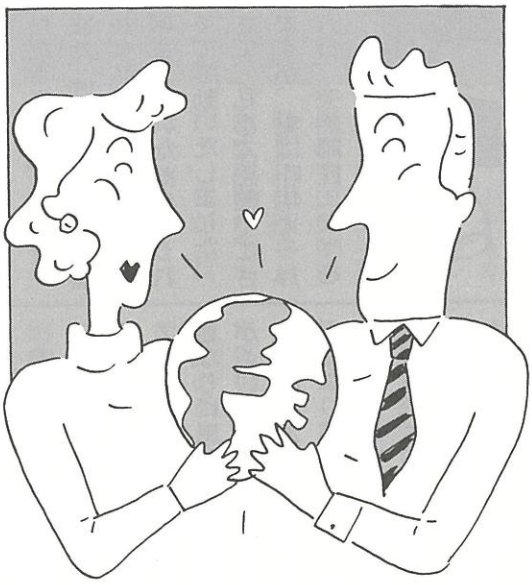
最近の世の中はＩＴ革命とかで、昔は江戸から京都まで東海道を泊まりながら行ったのに、今は新幹線で二～三時間の旅になったような社会の進歩が、さらに発展するのです。

とすれば、地球環境がどんな形で破壊されるのでしょうか。私は学者でありませんので解りませんが、何かの制約がなければ、地球は今よりどんどん悪くなるのは確かです。

今の社会は、全自動洗濯機、皿洗い機、クーラー、自家用車、掃除機、携帯電話…、充分以上の生活ではないでしょうか。

大正生まれの私は、電球は六十ワット一灯、ラジオ一台の生活でした。浦島太郎の夢みたいな生活だと痛感しています。だが、世界では一日一ドルで生活している人たちがたくさんいると聞かされるとハテナと思います。

日本はすでに「知足常楽」のレベルにあると思います。「幸せは心の中にこそある」と言われますが、その心で経済を見ると、まったく別の社会が見えてくるような気がします。



経済活動、環境、生態、地球…、大きなつながりを持ちながら、人間社会に結果を突きつけてくるでしょう。世界を人間中心で考えるのではなく、地球がどうなるかを基点として、考えていただきたいものです。

大きなことを言いましたが、私たちは、まず毎日のゴミを少量化、再生ゴミの分別など身近な生活から改めて行きたいと思います。

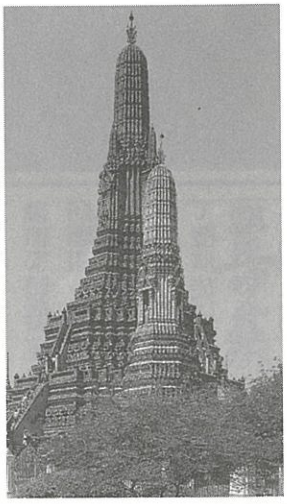
「足ることを知り、これを楽しむ」、心で新世紀を生きること、これは仏教徒であればこその努力ではないでしょうか。

日本の製品は世界一流です。なぜ、日本の製品はこんなにいいのでしょうか。いろいろな解釈があります。でも、日本人の態度や繊細な性格に大きな関係があると思います。どんな技術も、どんなすばらしい製品も、よい人柄から生まれると思います。

安善寺親睦旅行参加者募集中！

【世界遺産 アユタヤ遺跡とバンコク魅力の旅】

■期　　日/平成13年5月9日（水）～13日（日）《4泊5日》
■旅　　費/149,000円（他に手続費用4,200円）
■募集人員/23名
■申込締切/2月末日までに安善寺までご連絡ください　TEL.0258-32-2811



日程	行程	宿泊
5/9（水）	6:27発 長岡駅→→8:30発 東京駅→→11:00発 成田空港→→15:30着 バンコク到着後アユタヤへ	アユタヤ
5/10（木）	象に乗ってアユタヤ遺跡観光。バンパイン離宮など観光後バンコクへ	バンコク
5/11（金）	バンコク市内観光とショッピング	バンコク
5/12（土）	午前中フリータイム。昼食後カンチャナブリ観光	バンコク
5/13（日）	8:30発 バンコク→→16:00着 成田空港→→19:28発 東京駅→→21:13着 長岡駅着	

ありがとうございました。

大日寺　佐藤 正樹

光陰矢のごとし、御当山にお世話になり二十一年が過ぎました。

この間、いろいろなことがありました。現方丈様の晋山結制、先代方丈様の葬儀、本堂・庫裏の大改築、先代奥様の葬儀……、思い起こせば数限りない想い出でいっぱいでございます。

結婚前は、よく先代方丈様に「今日は一杯飲んで泊まっていきなさいよ」と優しいお言葉をいただき、その気になって大酒を飲んでひんしゅくをかったこと数限りなし。

私の結婚式では、式師を勤めていただき、人生訓を説いていただきました。

今日、今やるべきことはすぐに実行、自ら進んで体を動かされたあのお姿、なつかしく思い起こします。とかく理屈が先行し、実行と行動が伴わない現在の私たちの姿を嘆いていらっしゃるかも。

歌舞伎がお好きな先代奥様、何度かお土産に提灯をいただきました。今でも私の部屋に飾ってあります。ありがとうございました。

現方丈様、奥様には心身ともにお世話になり、たくさんの薫陶とご教授を賜り、本当に感謝申し上げております。

晋山式では、龍弘方丈様の山門到着のお姿に思わずS寺の方丈様とポロリ。うれしくも懐かしい想い出です。

本堂・庫裏の大改修では、お檀家さんといろいろな討論、いい勉強をさせていただきました。

また、昨年の七月は、近藤家長女弘子さんの結婚式に出席させていただき、うれしくて感動いたしました。

さて、私事で恐縮でございますが、実は昨年十一月十五日、突然師匠（父）を亡くしました。私の誕生日十一月八日には母の手術。経過は順調でひと安心と思っていた矢先に、本当に急な出来事でした。父を亡くして初めて親の苦労がわかってまいりました。

「行ってまいります」「ただいま」の生活、すべて親任せ、おんぶに抱っこの日々、反省しきりです。

安善寺方丈様の優しいお心遣いで、しばらく様子を見ながら安善寺に籍をおいてはとお言葉をいただき、私なりに思案いたしましたが、昨年の暮をもちまして、身をひかさせていただくことになりました。

本当に長い間、安善寺様、ご檀家様にかわいがっていただき、ありがとうございました。

最後に、師匠の葬儀、平成五年の私の晋山式など、安善寺護持会様には過分なる香資、お祝い、御供物などを賜り感謝の念にたえません。失礼をも省みず、寺報をお借りして、お礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

新年あけましておめでとうございます。

季刊誌がスタートして、いつの間にか三年になりました。早いものです。記念すべき新世紀のスタートの第十二号です。

写真のメンバーが、勢揃いした編集者スタッフたちです。新年号の編集会議が終わった後の顔ですから、ホッとして、何かこう肩の力が抜けた明るい顔です。

この後の般若湯効果に、気合とエネルギーが入っている顔つきと言ってもよい。

エネルギーといえば、人間の肉体からは生命のエネルギーとして、オーラ（霊波）という一種の力が出ているといいますね。活力あふれた健康体からはことに強くでているといわれます。

私たちの季刊誌からほとばしるあったかいオーラの力で、ご檀家の皆さまがあたたかな力を得られれば、うれしいと思います。

このたび、創刊号より編集委員を努めていただいた佐藤正樹師が、ご事情で退任されることになりました。

独特のキャラクターで、アドバイスや洒脱な記事を書いていただき、編集委員一同感謝いたしております。

新しいスタートで、さらなるオーラパワーを発揮して檀信徒にあたたかな活力を送ってあげてください。

ありがとうございました。

編集委員　安藤一夫

生を明らめ　死を明きらむるは

自己の生きている意味を納得し、死とはいのちとは何かに決着をつけることは

仏家　一大事の因縁なり

仏教徒にとって　二つとない重大な人生修行のご縁です。

（修証義第一章）

欲があるから人は悩む。そして、悩みを解決したいというのも、また、欲なのである。

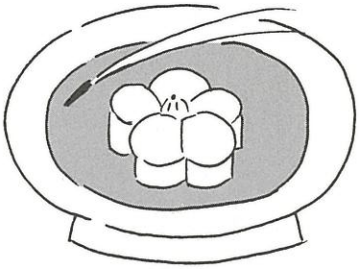
正月菓子雑記

編集部●小林国二

新世紀の幕開け、正月にふさわしいテーマをと、編集部より仰せつかりました。

しかし正月の行事は、どちらかといえば神道行事です。

「新年」を日本大歳時記で紐解きますと、年の始め、あらたまの年、新しき年、改まる年、迎える年、若き年、年明く、年立つ、年立ち返る、年変る、年の端、年の花、年頭、初年、新歳、改年、甫年、年始、年初など、すべて年の始めを意味しています。



正月は、一月と違って特別な意味合いを感じます。

菓子も十二か月の単位での意匠でなく、節や行事までの表現が加わり、表現期間はまちまちです。

正月菓子は特に干支から始まる菓子の幕開けで日本の正月を演出します。

勅題を菓子に表現するのもこのときだけ。松竹梅鶴亀の長寿を願う菓子、練切・鹿の子・キントン・諸蕷饅頭・浮島こなしなどの、材料で表現される和生菓子は、正月こその味わいがあり、豊かな心もちのときを、一服の茶とともに味わうことのできるのは日本の情緒そのものです。

今年の勅題「草」の表現は、店によっていろいろあります。歌にもさまざまな内容があるのと同じです。心を込めたそれぞれの老舗の味を楽しむのも一興です。

そもそも正月は、元旦に年神さまを迎えて、昨年の豊かな実りと平穏に感謝し、新しい年の豊穣と平安を祈念する行事でした。

鏡餅は年神さまへのお供えもの、神様にお供えする料理がおせち料理、供物を分かちいただいたのが、お年玉とされていました。

日本に古くから伝わるゆかしいしきたりは、どうぞ本年がよい年でありますように、との願いを託したもの。気持ちとしては神や仏ではなく、自分自身の穏やかな正月でありたいものです。

本年も、安善寺の会報に、お檀家の皆さまの絶大なるご支援とご鞭撻、そして投稿をお願い申し上げます。

安善寺流お正月

近藤マリ子

安善寺の寺族になって、二十七回目の新年を迎えました。

新潟生まれの私にとって、僅か五十キロしか離れていない長岡に嫁ぎ、城下町と港町の違いでしょうか、最初はいろんな場面で戸惑うことも多々ありました。

これは俗に言う長岡流のお雑煮ではないのですが、安善寺では昔から元旦は「小松菜のお雑煮」、いわゆる関東流だそうです。というのも、姑(はは)が、東京日本橋の生まれだった由縁とか…。

私でさえ前述した通りですから、いまから六十余年も前に、東京から長岡へ来られたということは、今でいうと外国、それ以上の感覚だったと思います。

習慣も文化も違うこの土地に嫁いで来られ、それも安善寺初めての寺族として入られた姑(はは)にとって、せめて元旦のお雑煮は関東流にしたかったからなのでしょうか…。

新潟流は大根・人参・牛蒡・筍・こんにゃくなどを短冊に切ったものに、鮭・とともまを一緒に煮て、醤油仕立てにしたものでしたから、最初の年は驚きました。それでも、その味が我が家流のお雑煮として馴染んでしまうと、柚(ゆず)を加え、あっさりとしてとても美味しいものです。

今では、元旦は「姑のお雑煮」、二日は「私流のお雑煮」でお正月を祝っております。

暮れの三十日になりますと、三が日仏様におあげする七膳分(朝晩)のお膳用と、家族が頂くおせち料理を大鍋で煮ておられた姿が思い出されます。

私がその頃の姑(はは)の年齢に近づいて来たせいでしょうか、同じ事をしている自分に気付く昨今です。

お別れ

(平成十二年九月～十二月二十日)

寒川庄三郎様　九月二日寂
東京都北区

中野　栄様　九月十七日寂
長岡市青葉台

小林力雄様　十月二日寂
長岡市蓮潟

高野虎雄様　十月十三日寂
長岡市豊町

佐藤峯子様　十月十四日寂
仙台市

竹田六太郎様　十月十九日寂
長岡市錦町

矢尾板キン様　十月二十一日寂
新潟市

若林享一様　十一月廿二日寂
長岡市千手

玉垣　好様　十一月廿四日寂
十日町市下川原町

鈴木武雄様　十二月十一日寂
長岡市愛宕町

斉藤正男様　十二月十九日寂
長岡市殿町

ご冥福をお祈り申し上げます。

第十三号、春号は平成十三年三月七日(水)発刊予定です。

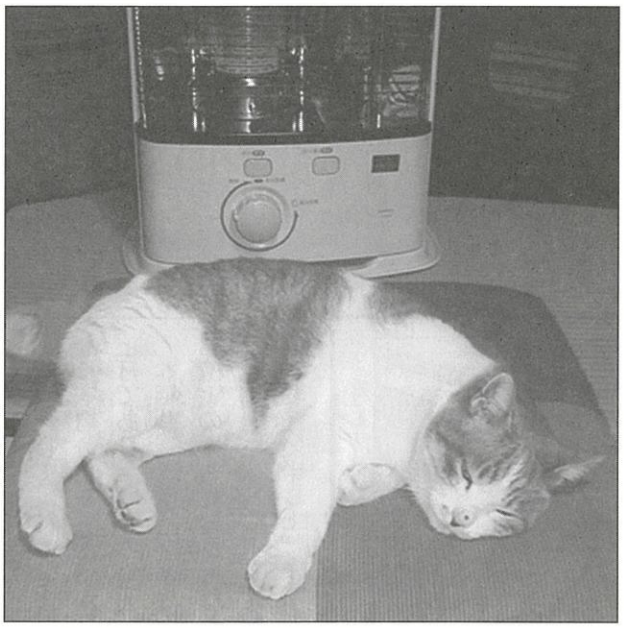
ペコ大蔵日記
パートⅡ

お兄ちゃんが大本山総持寺へ

ペコのひとりごと

今年は私も年女です。猫の年齢にすると、もうおばあちゃんです。この前、私が外から帰って来て、戸を開けてもらおうと、ひと泣きしたら、お茶の間の方から「アラ！　猫ちゃんだわ、何才かしら…」という声が聞こえ、続いてお母さんの「平成元年ですから、もう…」と答えている声が聞こえてきました。そしたら嬉しいことに「可愛いね、まだ二、三年くらいしかたっていないようね、人間だと歌手になれるかね！」など、とても嬉しい声が聞こえましたので、私もお茶の間に入れてもらって一緒にしばしくつろぎました。とても幸せなひとときでした。

お客様によっては、私が近づくと、サッと席を立って他の席に変わる人もいます。そうすると、お母さんが「ペコ、外へ出なさい」と言って、抱き上げられて戸を閉められてしまうのです。何もしていないのに悲しいです。



暮れのある日、十時過ぎまで夜遊びに出かけ、帰ってきたら、玄関の電気もついていましたし、鍵も開いていましたので、そーっと開けて入ってきて、部屋で毛繕いをしておりましたら、いきなり外部からの侵入者に襲われて、台所で取っ組み合いになってしまいました。

凄まじい音にビックリしたお母さんが「どうしたの！ペコ大丈夫？」と出てきてくれたものですから、侵入者は一目散に逃げましたが、台所は毛だらけ…。寒いのにお母さんはパジャマ姿で一生懸命掃除機をかけていました。かけ終わると私の方を向いて「開けても閉められないのなら、夜は外へ出ちゃダメよ！」と、一言…。まったくその通りです。世の中、殺伐としていますから、遅くまで鍵が開いているのは不用心ですからね！

こんな騒ぎがあったのに住職は気づかなかったのか、奥からは大きなイビキが聞こえてきました。

お寺でも巳年生まれのお兄ちゃんがいます。この三月から、鶴見の総持寺様へ約三年の修行に行くんだそうです。修行が終わるまで、私も元気でいたいと思っています。　ニャーン！

春号へのお便りをお待ちしております

春号は3月7日発刊です。ご家族、お子様、おじいさん、おばあさん、みなさんの投稿をお待ちしております。楽な気持ちでハガキかファックス、Eメールでどうぞ。お待ちしております。

〒940-0052
長岡市神田町1-4-10
蔵王山 安善寺　近藤 龍弘宛
FAX.0258-32-2870
E-mail:vc2r-kndu@asahi-net.or.jp

編集雑感

二〇〇一年、二十一世紀のスタートの記念すべき年。新年号の発刊に当たり、編集雑感を担当することになり、大変光栄に思っております（内心は…）。

それでは、新年のご挨拶をさせていただきます。

新年明けましておめでとうございます。本年も、この季刊紙「蔵王山・安善寺」のご愛読と、ご投稿をよろしくお願い申し上げます。

この季刊紙も早いもので三年が過ぎました。そこで、平成十年三月七日発刊の創刊号を取り出して読んでみると、この季刊紙の原点と言うに相応しい言葉が載っていました。それはまず、お寺に親しんでもらうこと、季刊紙を通じて壇信徒のコミュニケーションを大切にしたい、と書いてあり、まさにその通りだと思いました。

最近は、投稿の数も少しですが増え、市外、県外の方からも原稿が届くようになり、編集スタッフも大変喜んでおります。「実は、投稿の数が少ないと、いつ自分に原稿の依頼が廻ってくるやら、ソワソワ、ドキドキ、身体に良くありません」。編集委員の気持ちを察していただき、少しでも多数の方よりの投稿をお願いいたします。それが、この季刊紙を通じてのコミュニケーションにつながると確信しております。

今後は、家族全員が参加できるような季刊紙づくりができたらと思います。それには、各々のご家族の誰か一人でも、どんなことでもかまいませんから、投稿していただけたら、もっとこの季刊紙が身近なものになるような気がしておりますが、いかがでしょうか？

二十一世紀初めの年が、最良の年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

■小林　善秋